

実践のまとめ（小学校3年 外国語活動）

授業公開日 令和6年11月27日第5校時

指導者 新発田市立猿橋小学校

教諭 名古屋 康秀

1 研究テーマ

「話すこと（やり取り）」に対する自信を高める指導の工夫～自己効力感に着目した Small Talk の実践を通して～

2 研究テーマについて

（1）テーマ設定の意図

小学校学習指導要領の外国語において話すこと[やり取り]の目標は、「自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問したり、質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする」である。「その場で」というのは、[やり取り]の際に、それまでの学習や経験で蓄積した英語で話す力・聞く力を駆使して、自分の力で質問したり、答えたりすることができるようになることを指している（文部科学省、2017a）。すなわち、「話すこと [やり取り]」の領域では、既習表現を用いて自分の考えや気持ちをその場で伝え合う、即興的な言語活動を行っていく必要がある。

『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省、2017b）には、即興的な言語活動の例として Small Talk が提案されている。同書では、Small Talk は「あるテーマのもと、指導者のまとめた話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。」と説明されている。Small Talk を行う主な目的として、①既習表現をくり返し使用できるようにしてその定着を図ること、②対話の続け方を指導することの2点が挙げられている。既習の表現をその場で用いる即興的なやり取りである Small Talk を継続していくことにより、児童の即興でやり取りする力と英語に対する意欲と自信につながるのではないかと考える。

授業者は、昨年度バングラデシュの小学生と近隣の小学4年生との2度のオンライン英語交流を行った。覚えた英語に加えて、予期せぬ反応があったときを考え、実際に使ってみたりして試行錯誤を繰り返した。このような経験を積み重ねていくことで、子どもたちのやり取りする力が向上し、心理面でも人とコミュニケーションする楽しさに気付くことができた。意識調査では「実践前と比べると外国語でやり取りすることに自信をもてるようになりましたか」の項目に対して81.1%、「実践前と比べると自分が話す英語は相手に伝わりますか」の項目に90.9%の子どもが肯定的評価をした。

しかし、意欲を高めた児童がいる一方で、「英語で話すのに自信がなくなった。話すのが怖い。」と意欲や自信が低下した児童もいた。調査結果からも10～20%の一定の子どもは、授業者の施した手立てが自信につながらなかったと言える。今年度、授業者は異動し、別の小学校で3学年を担当することとなった。子どもの実態は変わるが、やり取りへの自信をつけるための手立てを追求することとした。

早津(2022)は外国科における「話すこと[やり取り]」の動機付けを高める指導について「子ども同士でやり取りをする Small Talk において、児童が自身の成功体験を自覚したり、他の児童の成功体験場面を観察したりできるような手立てを講じることにより、『話すこと [やり取り]』の自己効力感と動機づけを高めることができた」と報告した。早津の実践は7回の活動検証と限定的となり、継続的に長きにわたって Small Talk を実施し、子どもたちの技能や意欲の変化を検証していく必要がある。また、早津は6学年を対象に実践を行ったもので、3学年という外国語活動スタート段階での実践事例は見当たらない。本研究では早津の実践を参考に3学年を対象に長期的かつ継続的に Small Talk の検証を行い、「話すこと [やり取り]」への自信を付けることを目的とする。

（2）研究テーマに迫るために

早津は特定の課題に対する自信と解釈される「自己効力感」という概念に注目した。Bandura(1977)によれ

ば、自己効力感が変化する情報源には以下のようなものとされている。

- ・遂行行動の達成：自分で実際に行い、成功体験をもつこと。
- ・代理的体験：他人の成功や失敗の様子を観察することで、「自分にもできそうだ」と感じたり、逆に自信を弱めたりすること。
- ・言語的説得：自己強化や他者からの説得的な暗示を受けること。
- ・情動的喚起：「今日は気分がいいからうまくやれそうだ」というように、自分の心理的な反応の変化に応じて自己効力感を喚起すること。

中でも早津は「遂行行動の達成」と「代理的体験」に焦点を当てて実践を行った。児童同士がやり取りする Small Talk において、児童が自身の成功体験を自覚したり、他の児童の成功体験場面を観察したりできるような手立てを講じることにより、英語でのやり取りに対する自己効力感と動機づけを高める授業実践を目指した。言語的説得は科学的に分析することがあり、情動的喚起は偶然性が高く再生可能することがあり、ともに難しさがあることから、授業者も早津同様に遂行行動の達成と代理的体験に重点を置いて実践することとした。早津が設定した手立ての中で、「遂行行動の達成」のために用いられた「振り返り場面での対話録画映像」について記述すると、児童はタブレット端末で自身の対話の様子を録画して Small Talk の様子を録画しておき振り返りの際にそれを視聴した。早津は振り返り場面での対話録画映像の有効性を明らかにした一方で、動画で自分の対話を見返した時に自分の誤りの部分にばかり注目してしまう子どもの姿も観察した。この姿から、やり取りができていない自分自身に気づき、自信を低下させてしまっているのではないかと考えた。「自分はできていたつもりだったけれど、全く話せていなかった。相手は頷いてくれていたけれど、動画では全く聞き取れなかった。」というショックを受ける可能性がある。それよりも子どもの感覚を大切に、「言えた・伝わった」という実感を伴うような手立てはないかと考えた。そこで、今井(2023)の振り返りの視点を取り入れた Small Talk の実践に注目した。今井は、振り返りにおけるルーブリックやモデルの提示は子どもたちにおいて記述内容の質的向上につながったと述べている。さらに、質の高い振り返りを行う児童には、それに伴って発話パフォーマンスも向上することが示唆された。授業者は、早津と今井を参考に、研究テーマに迫るために自己効力感理論の概念と手立てを表1に記す。

表1 授業者が活用する自己効力感理論の概念と手立て

自己効力感理論の概念	手立て
遂行行動の達成	・日本語でのペアトークとの連携 筆者の学級において朝の会に行われている1分間のペアトークの話題とその日の外国語の Small Talk で話す話題を同様のものにする。 ・振り返り場面でのルーブリック評価 振り返りの視点として4段階で構成されたルーブリックを提示し自分の状況に合う数値に丸を付ける。
代理的体験	・他の児童の対話の観察 児童がタブレット端末で自分たちの対話の様子を録画し、それを「ロイロノート・スクール」という授業支援アプリを活用してクラスの全員が共有する。

(3) 研究テーマに関わる評価

本実践の効果を探るために次のような方法を用いて評価する。

- ① 事前、事後のアンケート調査を実施し、子どもたちの外国語活動や「話すこと(やり取り)」に対する意欲や自信、抵抗感などに関する意識の変化を測定する。また抽出児童を選出し、単元ごとに振り返りやアンケート結果から変容を読み取る。
- ② 実践後にテストを行い、学習内容の習得方法を分析する。
ALT や友達、既習単元の表現をいくつ使うことができたか、会話を続けるための工夫を生かしていたかを分析する。

(4) テーマに関わる1学期の活動の実際

① 自己効力感理論における遂行行動の達成の手立てについて

遂行行動の達成に向けた日本語でのペアトークの関連については、国語「知りたいことを考えながら聞き、しつもんしよう」の単元と関連させて、朝の会から国語の時間に変更しペアトークを取り入れた。子どもたちは意欲的に質問したり、メモをとったりして日本語でのやり取りを楽しんだ。外国語活動の時間では、英語表現が少ないのでHow are you? I'm ~. から始めて、ALTに聞いたり、単元で学んだ表現を追加したりしながら進めていった。

振り返りにおけるルーブリック評価では、授業者と児童がともに作りあげて自分の状況に合う数値に丸をつけてもらった。1学期に行ったアンケート結果を表3に示す。

表2 Small Talk の振り返りにおけるルーブリックと振り返りカード

	表現(ひょうげん)	会話(かいわ)	態度(たいど)
S	ならった表げんを3文以上つかったり、しつもんを3回以上したりすることができた。	スラスラとたずねたり、答えたりすることができた。	相手の目を見る、聞き取りやすい声、ジェスチャーの3つができた。
A	ならった表げんを2文以上つかったり、しつもんを2回以上したりすることができた。	つかえることがあっても、自分の力でたずねたり、答えたりすることができた。	相手の目を見る、聞き取りやすい声、ジェスチャーのうち2つができた。
B	ならった表げんを1文以上つかったり、しつもんを1回以上したりすることができた。	友だちや先生にヒントをもらって、たずねたり答えたりすることができた。	相手の目を見る、聞き取りやすい声、ジェスチャーのうち1つができた。
C	ならった表げんをつかえなかつたり、しつもんできなかつた。	友だちや先生にヒントをもらっても、たずねたり答えたりできなかった。	相手の目を見る、聞き取りやすい声、ジェスチャーができなかつた。

表3 Small Talk の振り返りにおけるルーブリック評価の結果(%)

質問	C	B	A	S
表現レベルはどのくらいでしたか?	8	34	24	34
会話レベルはどのくらいでしたか?	20	15	28	36
態度レベルはどのくらいでしたか?	0	21	21	58

3・4の肯定的評価をした子どもの割合は、表現は58%、会話は64%、態度は79%であった。ここから表現と会話のレベルが低いことが分かる。会話ではCに付けた子が20%いて、2極化が進んでいることが分かった。

② 自己効力感理論における代理的体験の手立てについて

当初、児童がタブレット端末で自分たちの対話の様子を録画して全員で共有する予定であったが、児童はタブレットで人を写すことに強い抵抗感を示したので、教師のタブレットでモデルとなるペアを録画し、モニターで示して共有することにした。

3 単元と指導計画

(1) 単元名 「This is for you カードをおくろう (Unit7)」 (Let's Try1 文部科学省)

(2) 単元の目標

- ・形の言い方や欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。
- ・欲しいものを伝えたり尋ねたり答えたりして伝え合う。
- ・相手に伝わるように工夫しながら伝えようとしている。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
〈知識〉 形の言い方や What do you want? ~please. Here you are. This is for you. Thank you. You're welcome. の 欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現を用いて考えや気持ちなどを伝え合う表現について理解している。 〈技能〉 形の言い方や What do you want? ~please. Here you are. This is for you. Thank you. You're welcome. の 欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現を用いて考えや気持ちなどを伝え合う技能を身に付けている。	欲しいものを伝えたり尋ねたり答えたりするために、自分や相手のことについて簡単な語句や基本的な表現を用いて考えを伝え合うことができる。	欲しいものを伝えたり尋ねたり答えたりするために、自分や相手のことについて簡単な語句や基本的な表現を用いて相手に伝わるように工夫しながら、伝えようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画(全15時間) ※別紙 単元構想図参照

時	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 ～ 4	UNIT5 What do you like? 家族にインタビューするときの尋ね方の表現に慣れ親しむ。	・友だちの好きなものを当てるインタビュービンゴゲームをする(スポーツ・果物・色) ・私は誰でしょうゲームをする。(好みを英語で尋ねてヒントを得て、誰のことを言っているか推測する。) ・スポーツ・色・果物・飲食物に関する単語表現に慣れ親しむキーワードゲームをする。(帯活動) ・家族の好きなものをインタビューしてくる。	本時では記録を残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。
5 ～ 8	UNIT6 ALPHABET メッセージカードに記入する THANK, YOU, DEAR, FROM の読み方と意味を理解し、教師の手本を見ながら書き写す。	・ロゴマークやお店の看板に注目し、どのアルファベットが書かれているかを推測し、音と文字をつなげる活動を行う。 ・ALT の発音を正しく認識し、アルファベットカードを選ぶ活動を行う。 ・アルファベットの仲間分けクイズをする。(形や音などアルファベットの特徴を捉えて分類する) ・袋の中に入っているアルファベットを触って当てるゲームをする。 ・THANK YOU, DEAR, FROM の読み方と意味を理解し、教師の手本を見ながら書き写す。	知識・技能 ・アルファベットの文字と音を結びつけることができる。 ・THANK YOU, DEAR, FROM の読み方と意味を理解し、教師の手本を見ながら書き写すことができる。 【行動観察・ワークシート・振り返り】
9 ～ 15	UNIT7 This is for you. ・買い物ごっこを行い、自分がほしいメッセージカードの飾り付けを注文する。 ・メッセージカードを作成して、家族に思い	・世界のグリーティングカードに関する動画を視聴する。 ・インタビューをもとに飾り付け(動物・形・飲食物・果物・スポーツ)を選ぶ。店員とお客に分けて、尋ね方や応え方の表現に親しむペア活動を行う。 ・メッセージカードの下書きを作成した後、買い物ごっこのリハーサルを行い、課題と成果を明らかにする。 ・「伝わらない、どう言ったら分からない、新たな表現を使いたくなった」などの不測の事態を想定し、そういう場面での対応策について考える。 (「もう1回言ってください。ヒントください。いら	思考・判断・表現 ・買い物ごっこで店員として相手の欲しいものを尋ね、答えられたことを理解して品を渡すことができる。 ・買い物ごっこでお客として自分の欲しいものを伝え、メッセージカードに必要な品を獲得することがで

	を伝えよう	っしやいませ。同じ物を2つください。」) ・買い物ごっこを行い、カードの飾り付けを得る。 【本時】 ・カードに宛名 (DEAR-, FROM-) やメッセージ (THANK YOU) を記入して飾り付けを行って作成する。 ・家族に感謝の気持ちを添えてプレゼントする。 ・動物・形に関する単語表現に慣れ親しむキーワードゲーム (帯活動)	きる。 【行動観察・振り返り】
--	-------	--	---------------------------

4 本時の展開 (本時 14 / 15 時間)

(1) ねらい

- ・買い物ごっこで店員として相手の欲しいものを尋ね、答えられたことを理解して品を渡すことができる。
- ・買い物ごっこでお客として自分の欲しいものを伝え、メッセージカードに必要な品を獲得することができる。

(2) 展開の構想

店員とお客に分かれて買い物ごっこを行う。これまで学んできた表現(チャットによる日常会話・品物に関する単語・買い物でのやり取り)を使って、メッセージカードを作成するために必要な品(形や動物などのカード)を獲得することを目的に活動を設定する。お店とお客に分かれてやり取りを交互に行い、完成をイメージしながら、自分に合うカードを探しながら買い物を楽しむ。

(3) 展開

時	学習活動	□評価○支援◇留意点
3 7 30 5	・英語でペアトークを行う。 ・本時で扱う既習表現の復習とめあてを共有する。 【めあて】 ◎ メッセージカードに必要な飾りを集めよう。 【客】 ◎ お客さんが求めている商品を探ねて、気持ちよく買い物してもらおう。【店員】 ・店員と客に分かれて買い物ごっこを行う。(前半 12 分・中間振り返り 6 分・後半 12 分) ・飾り付けの種類ごとにブースを設けて、店員とお客に分かれて行う。 ・前半の終了後に全体で振り返りを行い、課題や成果を明らかにしてから、後半を行う。 ④ 本時の振り返りをする。	○買い物ごっこで活用する表現を組み込んでトークをするよう声掛けをする。 ○既習事項を掲示して、必要に応じて活用できるようにする。 ○お店を5つ開き、自分の目的に応じて行きたいお店に行く。空いているところに行くよう声掛けをする。 ○お客が来ない場合、参観してくれる先生方にお客として入ってもらい発話の機会を増やす。 ○飾り付けが早く終わって時間が余った場合、買った物を参観してくれる先生方に紹介する課題を与える。 □相手に伝わるように工夫して考えや思いを伝えている。 □既習表現を使って、相手に気持ちを伝えている。

(4) 評価(単元の評価基準に準ずる) 評価方法：振り返りシート・行動観察・ビデオ分析

5 実践を振り返って

(1) 研究テーマに沿った活動の実際

家族にサプライズギフトカードを送ることを最終目標に活動を構成した。単元ごとにミッションを設定し、学んだ表現を書き加えたり、絵カードを貼ったりして完成させていった。UNIT5では“What ○○ do you like?”を使って家族の好きなものをインタビューした。UNIT6では大文字アルファベットの書き方を真似てDEAR○○とFROM○○とTHANK YOUをギフトカードに書き写した。ギフトカードは飛び出すしかけカードになっており、家族の人の好みの絵カードを貼って飾り付けることを目的に、UNIT7では買い物ごっこを通してカードを得る活動を行った。店員とお客に分かれて“What do you want?”、“I want ○○.”、“Here you are.”、“Thank you.”の表現を使ってやり取りをした。児童は意欲的に取り組み、表現が分からなくなったら友達や授業者に聞いて英語で話そうという姿勢が見られた。聞き取れなかった場合に“One more please.”や同じ物を複数ほしいときは数字を入れたり、andを使ったりすることを中間指導し、後半にその表現を使ってやり取りする児童が出てきた。その他、売り切れや商品にないものを要求されたときに“No, sorry.”と即興的にやり取りする児童もいた。最終的に全員が求めるギフトカードを得ることができて満足していた。

(2) アンケート分析からの考察

Small Talkの振り返りにおけるルーブリック評価を実践途中と事後の2度行ったものを表4に示す。

表4 実践途中10月と実践後12月の結果(小数第一位を四捨五入で示す：%)

質問	10 月				12 月			
	C	B	A	S	C	B	A	S
表現レベルはどのくらいでしたか?	3	15	46	38	0	15	44	41
会話レベルはどのくらいでしたか?	7	7	30	57	0	7	37	56
態度レベルはどのくらいでしたか?	3	15	42	61	0	4	26	70

表現・会話・態度のいずれの項目も肯定的評価(SとA)した児童の割合が増えてたことが分かる。英語での表現が広がり、スモールトークの回数が増えていくほど自信を付けたことが分かる。事前アンケートで表現と会話レベルにC評価を付けた児童は10月には会話でBを付けていて「言う言葉を忘れてしまった」と振り返った。12月には同じく会話でSを付けていて「これからは色々な英語を学んでレベルアップしたい。」と記し英語への向上心が出てきたことが分かった。

(3) 成果と今後の課題

複数の単元に跨がる明確なゴールを設定し、スモールトークを繰り返し、魅力的な言語活動を計画的に構成することで話すこと(やり取り)への自信を高め、情意面の成長につながる可能性があることが示唆された。しかし本レポートで結論づけることはまだできないため、3学期も実践を続けていきたい。言語面については3月にテストを行い、学習内容の習得方法を分析したい。3年生は外国語活動のスタート学年であり、表現や語彙も少ないので、やり取りする難しさはあるが、英語に対するモチベーションを高め、生き生きと英語を話す児童を育てたい。そして4・5・6年と表現を増やし、「分かった。伝わった。」という実感を得ることでさらなる高みへとつながると考える。英語を通して、世界への関心を高めていてもらいたい。

【参考文献】

- ・早津康平「小学校外国語科における『話すこと[やり取り]』への動機付けを高める指導の工夫」、2022年、上越教育大学教育実践研究、第32集、p157-162
- ・Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84, 191-215